

秋は飼料作物の栽培に有る有利な季節であります。

その理由は、

(1) 裏作（後作）という耕地の休閑期を利用して生産を擧げることが出来る。

(2) 草地改良の牧草導入（播種や移植）

の絶好の季節であります。

即ち零細な經營の多いわが国では、北海道及び山地帯はともかくとして、府県における平地では余程条件に恵まれた經營農家は別として、夏畠地に飼料作物を十分栽培して、酪農を組入れる、という事は難かしいのであります。しかし、夏草を路傍堤塘の牧草化に求め、カブ等のような集約多収の作物を巧みに利用し、早春の青草と、サイロ用埋草及び乾草を裏作（後作）に需めるときは、酪農は更に範囲を拡げ、その上堅実さを加える事が可能であります。そしてこの裏作（後作）は只單に飼料生産に役立つだけではなく、土壤を保全し、耕土を肥培してくれます。

又私どもの手近かな處にある生産力の低い野草地も是非改良して、農業生産に役立てて行かなければなりませんが、野草地の多くは荒廃し、悪質の草が根強くはびこつてなかなか容易に改良牧草の導入が出来ない状態にあります。しかしこの野草も秋に弱つて、いわゆる「秋の枯野」となります。この時季こそが優良牧草の播種や移植のチャンスであります。発芽した許りの牧草を野草と競合させる事は不利で、秋から冬にかけて、野草の生育の最も劣えてい

家畜の種類、頭数、大きさ、能力等からみて、必要な維持飼料の全部と牛乳の生産を上げるために、生産飼料も大部分は裏作や草地改良に求めることとして、どの程度の飼料生産をしなければならないかを必要養分量から算出することが第一であります。

(1) 飼料作物の選定をよく行うこと

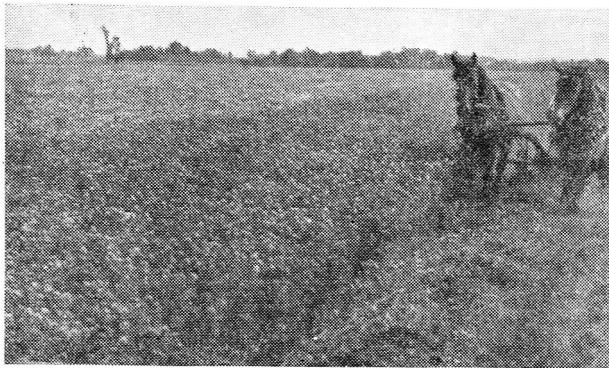
適地に適作を特に気候と土壤に適合した作物を、そして裏作の場合は生育日数を詳知して、表作の邪魔にならないものを、又土地を肥培し、土壤保全にも役立ち量的にも質的にも反収の上がるものを選ぶことが必要であります。一種類でこのような多目的を達する作物は少いので極力混播によって行うよう心がけた方が得策であります。（特徴一覧表を参照して下さい）

(2) 播種適期を知つて置くこと

秋播きの場合は特に晚播きの限界を知つていなければなりません。如何に寒さに強い作物でも稚苗時に強い霜や、凍結があつては枯死します。（栽培基準一覧表を参照して下さい）

(3) 施肥を行うこと

裏作は勿論のこと、草地にも肥料を施すことを忘れてはなりません。なるべく早く生育させ、そして寒さに耐える貯蔵養分を豊富に蓄積するためにも肥料が必要であります。又施肥は単に増収だけではなく、生産される飼料の養分含量を濃厚にし、家畜の嗜好も増すという二重、三重の効果をもたらしてくれます。（施肥量の基準は栽培基準一覧表を参照して下さい）



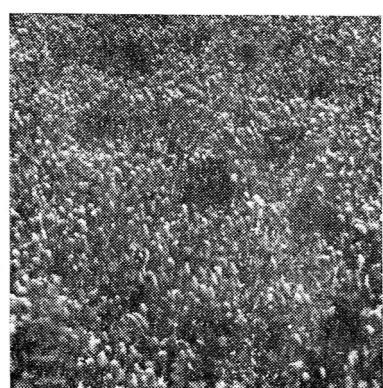
赤クロバー刈取り状況

軽鬆な磷酸欠乏土壤に向く牧草 牧草
一年性 クリムソン
クロバー

わが国の高度集約地帯の殆どは火山灰土であり、そして磷酸分に欠乏しております。壹科牧草の生育を良好にするためには磷酸分の補給が絶対必要であります。広大な牧野に十分に施すことは経済的にならぬことではありません。クリムソンクロバーはこの磷酸欠乏でも割合によく生育し、酸性に耐え、しかも秋播きしますと、早春には旺盛に生育しますから、開墾当初の雑草の蔓延も防いでくれ、開墾牧野には必ず用いたい草の一種であります。

開花盛期のクリムソンクロバー

大仕掛けな機械開墾の場合は表土は天返しで非常に瘠せております。このような場合にまずこの不良土壤（磷酸と酸性）に耐える力の強いクリムソンクロバーを秋播きし、春の雑草を抑圧し、鋤込み有機質の蓄積を行つてから、本格的な牧草播種に移るのは廻り道のようですが却つて優良草地を造成する一つの方法であります。

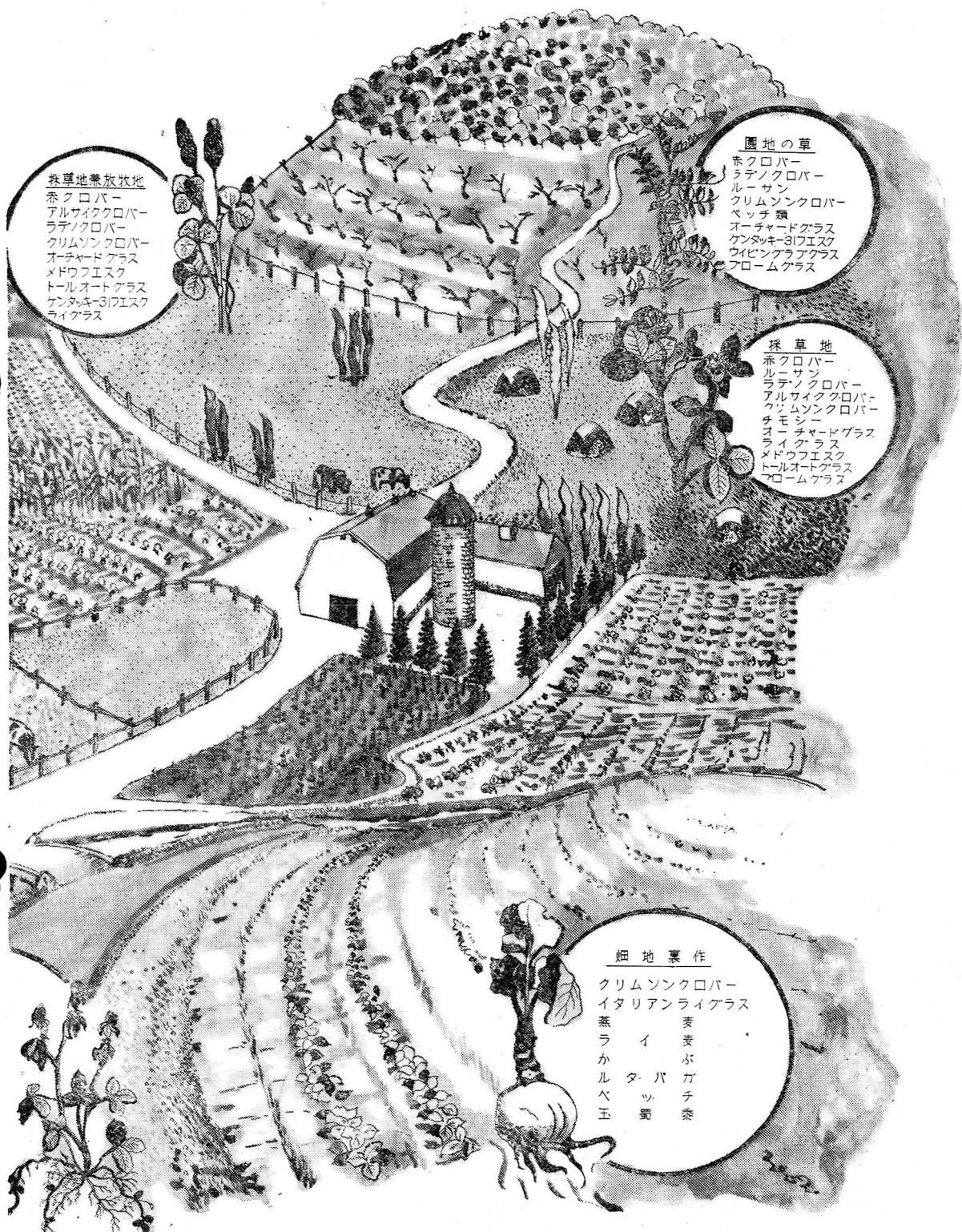


（） この有利な秋播飼料作物の栽培に当つて考慮すべき点を挙げますと、
（） 飼料をどれだけ生産したらよいかを 知ること

を造成する一つの方法であります。

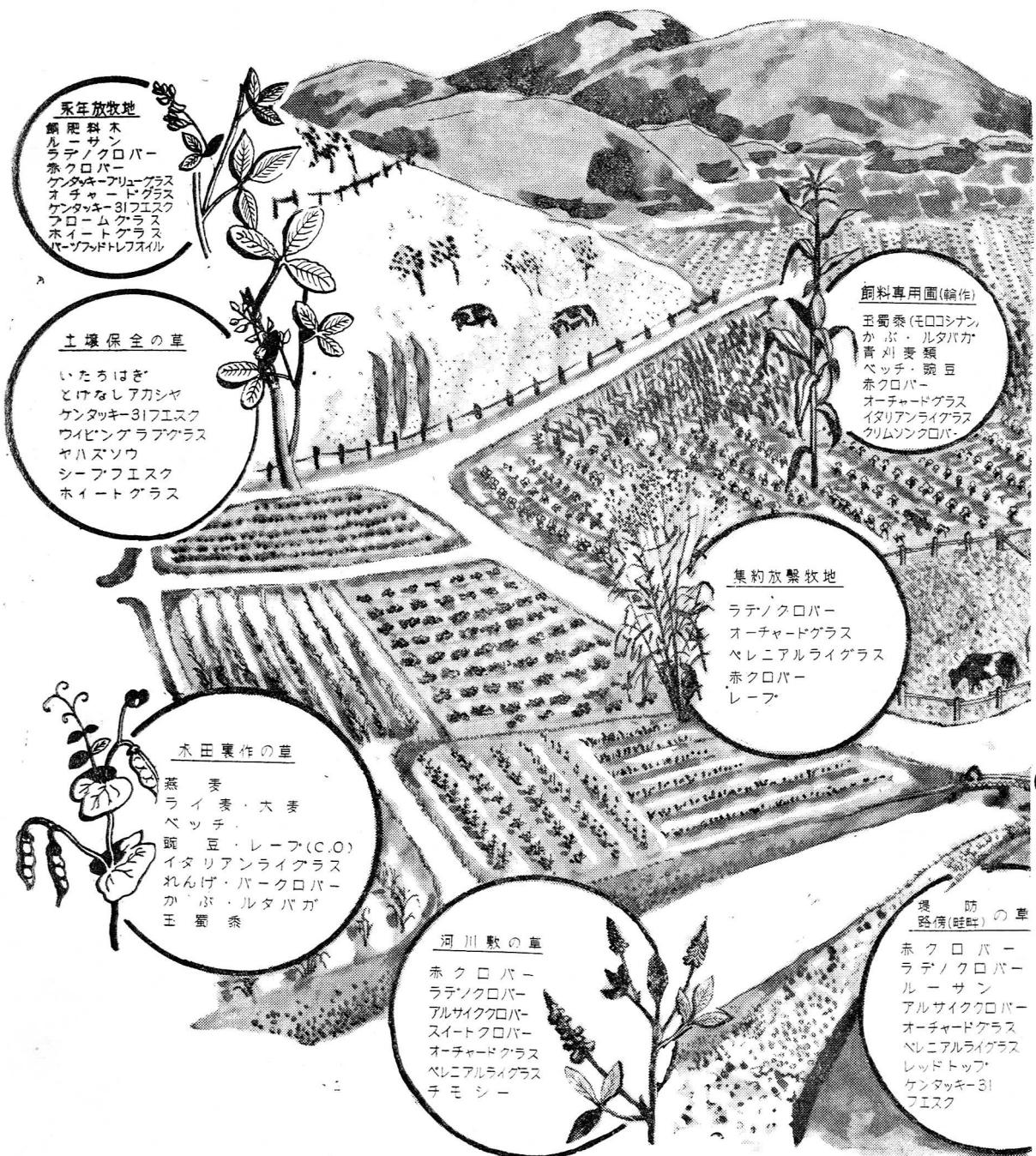
（） この有利な秋播飼料作物の栽培に当つて考慮すべき点を挙げますと、
（） 飼料をどれだけ生産したらよいかを 知ること

される飼料作物絵図



こんなによい草地

各種耕地・草地に秋播



ちょっとの工夫で